2013（平成25）年4月8日

相愛中学校･相愛高等学校

校　長　　安　井　大　悟

始業式式辞

今冬はとりわけ厳しい寒さの冬でしたが、急に春らしくなり桜も見頃を過ぎたようです。

新入生中学校45名、高校96名をお迎えして2013（平成25）年度始業式を執り行うにあたり、一言式辞を述べます。

私は校長の安井大悟と申します。私も新入りなのです。どうぞ在校生の皆さま、よろしくお願いいたします。前任校は龍谷大学付属平安でした。同じ浄土真宗本願寺派の宗門校で京都にあります。ご存知の方も多いかと思いますので平安のことはまたの機会に譲って･･･

まずは校長先生が短年度のうちに次々と替わったことに伴い、みなさまにご迷惑をおかけしたことと思います。私からお詫びを申しあげます。このように就退任がくり返されても在校される生徒のみなさまの学業と学園生活には支障をきたさぬよ

う、理事長・学園長をはじめ教職員の方々のご配慮があったことにも感謝申しあげたいと思います。

さて、私学の宗門校は、教育の目的として『こういう人間づくりをしたい』という願いを持っています。これを難しい表現になりますが、建学の精神と呼びます。

わが相愛学園は、校名の由来ともなっている當相敬愛（とうそうきょうあい。自他ともに仏の子である。まさに相敬愛すべし）「深い因縁によってこの世に生まれ、み仏に見守られ、多くの人や物のおかげで生かされているわが身に感謝するとともに、自らを敬愛し、他を敬愛し、真実を求め、強く美しく生きようと努力すること」という意味です。これは建学された年、1888（明治21）年以来125年間、変わることがありません。

新入生のみなさまは勿論のこと、在校生のみなさまもそれぞれに学年が一つ進み、ノートや教科書もまっさらの1ページを開く日ですね。こういう風に考えてほしいと思います。今日という日、すなわち2013年4月8日は今日しかありません。それぞれの人生の中においても今日は1回きりしかないということです。この瞬間は、もう二度と戻ってはきませんね。このことをしっかり見極め、今を大切に生きる人であるよう努めることも宗門

校に学ぶ生徒の姿勢なのです。だから一刻一刻を大切に、そして悔いのない瞬間の連続であるよう努力してくださいね。

最後に一つ慣用句をご紹介しましょう。
『袖振り(触り)あうも他生(多生)の縁』です。
見知らぬ者同士が道を歩いていて袖が触れあうという程度のささいなできごとも、決して偶然に起きたことではないのですよ。前世からの因縁によっておこるものだと考える生き方のことです。だからふとした人間関係も大切にしなさいよ、という意味を込めた慣用句です。

昔はきもの姿でしたから、すれちがいざまにふっと袖が触れあったのですね。それ位は何でもないと思えばそれまでですが、同じ時刻に他人同士が出かけてすれちがう、そして袖が互いにふれあう、なんというめぐりあわせかしら？この様子を縁、因縁という仏教的な見方や考え方に立ってこの表現が生まれたのです。

今のことを今生と言います。私の生まれる前を前世と言います。また死んだあとは仏教的にはお浄土へ行き阿弥陀如来様のお側で永遠のいのちを生きると考えます。これを、死んだあとの生、後生と呼びます。

つまり、今生だけのめぐりあいではなく、前世や後生の因縁

によって起こるものと考えたのですね。だから他の生の縁と表現されました。まことに仏教的とらえ方から生まれた慣用句であると申せましょう。

今日から新しいクラスで一年間机を並らべるクラスメートとは、袖触れあう程度のめぐりあいではありません。いったいどんな深いご縁があったことでしょうね。そしてこれからも、どんなに深いご縁を結んでいかれることでしょう！

・

私のいのち、あなたのいのち、ともにかけがえのない尊い存在、この尊厳性に気付くことのできる相愛中学生、高校生であり続けてくださいね。

以上をもって始業式の式辞とします。

合　掌